

# 資源をムダにせず活用したい だから『耕畜連携』で互いを認め合う

農業技術振興センター企画情報部

## 【普及活動のねらい・対象】

近江牛の飼料として「稲わら」は重要であり、高品質牛肉を生産する肉牛農家は品質にこだわった安全・安心な稲わらを求めています。しかし、肉牛農家側の労力的な限界から稲作県でありながら地元の稲わらが十分に活用できていない状況にあります。

一方、稲刈り後に麦を作付ける水田では、稲わらが邪魔者扱いされ焼却されている場合があります。また、良質米の安定生産のために家畜ふん堆肥を求める耕種農家もいます。



稲わらが邪魔な人と欲しい人、堆肥を使いたい人と使って欲しい人、同じ農業者でありながら接点がありません。環境に配慮した継続的な農業に努める集落営農組織や大規模担い手農家と、安全・安心な地域産飼料の活用を図る肉牛農家とを対象に、あるべき姿を目指して互いの立場を認め合い協力していくための連携活動を支援しました。

## 【普及活動の成果】

### 稲わらの飼料化

肉牛農家が求める品質程度を理解してもらえよう、耕種農家にはシッカリ乾いた稲わらでないことと飼料にならないことを強調し、現地では乾燥・収集作業のポイントを示しました。

対応した3つの集落営農組織は機械を導入し、大規模耕種農家は肉牛農家の古い機械を有効活用するなど、各々に継続的な取り組みとなり供給先の肉牛農家8戸では耕種農家から100トン以上の地域産稲わらを購入しています。



### 家畜ふん堆肥の活用

環境こだわり農業の普及拡大とともに、家畜ふん堆肥の利用について理解や意識が向上したことが、稲わらを飼料化収集した50ha余りの水田に堆肥が還元されています。

耕種農家で家畜ふん堆肥の散布機械が導入され資源循環型農業が定着しています。



### 耕畜連携の拡充

お互いに認めあえる関係が出来ると、飼料用米や稲発酵粗飼料など生産調整水田を活用した安全・安心な地域産飼料の地産地消がすすみ、畜産物の高付加価値化が期待されます。

さらには、地域との連携を重視することで地域農業の合理性や持続性が高まることから、耕畜連携による地域資源の有効活用を支援します。